市民タイムス　平成22年（2010年）（第三種郵便物認可）6月15日（火）（10）

望岳山荘にて

中嶋　嶺雄

川島芳子は生きていた

去る5月下旬から6月上旬にかけて、久しぶりに中国の長春を訪問した。私が学長を務める国際教養大学と中国東北部で最大級高位の吉林大学との交流協定締結のためであった。「熱烈歓迎日本国際教養大学中嶋嶺雄校長来訪」のネオンサインも掲げられていて、中国側のホスピタリティにあらためて感心した。

その一方、私が松本市出身であることも知っている長春市の文化人の方々が私の訪問を待っていてくれて、彼らが最近新たに調査し検証したという川島芳子の生存説を一生懸命に説明しようと私を囲んでくれた。その新しい調査記録は、この5月末に吉林文史出版社から李剛・何景方共著の『川島芳子生死の謎』というタイトルで出版されたばかりであり、私の教え子で現在長春農業大学で教鞭をとる野崎晃市君が日本語に訳して、この6月初旬に東京の星雲社から日中同時出版されている。

私たちの松本市にゆかりの深い川島芳子が当時の国民政府当局発表のように昭和23（1948）年3月に「漢奸」として北京で銃殺されたのではなく、実は長春郊外の新立城で昭和54（1979）年正月に72歳で死去するまで30年以上も生きていたという事実は、長春ではすでに新聞やテレビでも報道されている。右の本も早速書店に並んでいた。

私が今回驚いたのは、川島芳子が身分を隠して「方おばあさん」として生きていたときに可愛がられ、沢山のことを教えられたという張鈺さんとその実母で「方おばあさん」の養女だったという段霞翼さんと私との会見であった。張鈺さんは1967年生まれの女流画家であるが、「方おばあさん」と過ごした12歳までの幼少期のことを実によく覚えていて、とても上品で物知りの「方おばあさん」は松本に住んでいたときの思い出を克明に語っていたと詳しく話してくれた。美しいアルプスの山々、松本城のスケッチ、浅間温泉、馬に乗って通った女学校時代、さらには信州に伝わる「姥捨て」伝説のことなどを、「方おばあさん」が故郷を懐かしみながら、ときには涙ながらに語ってくれたというのである。張鈺さんは「方おばあさん」に習ったという「蘇州の夜」「蘇州夜曲」など戦前に李香蘭が歌った流行歌や「赤とんぼ」などの小学唱歌を私に歌ってきかせてくれた。

言うまでもなく「東洋のマタハリ」とか「男装の麗人」とも呼ばれた川島芳子は、清朝の粛親王（愛新覚羅善耆）の第14王女として生まれ、郷里松本が生んだ国士・川島浪速の養女となって、松本には15歳から6年間住んだとされている。その生存説が確認されたとなると、松本市蟻ケ崎木沢の正麟寺にある川島浪速の墓に分骨されたのは芳子の遺骨ではなく、実際は浙江省天台県の国清寺に葬られたのだという。

昨年3月に松本を訪れた張鈺さんは川島浪速と芳子の墓を詣でたというが、そのときに彼女は「私はここに埋葬されているのは川島芳子ではないと知っています。私の方おばあさんが本物の川島芳子だからです。私が哀悼をささげたのは『替え玉』になった可哀想な人のためです」と述べたという。

（国際教養大学理事長・学長＝松本市出身）